答　合併以降、事務の合理化による職員数削減や指定管理者制度の導入、公債費抑制などの行財政改革に積極的に取り組んだ結果、人件費は合併後10年間で約51億円削減、財政調整基金の残高は平成16年と平成25年との比較で約32億円増加、地方債残高は平成15年と平成25年との比較で約21億円縮減といった効果があった。

その反面、改めて市民アンケートなどで明らかになった課題への対応について、1点目に、行財政の効率化として、公共施設の有効活用や長寿命化、統廃合などの総合的な検討、産・学・官・金の連携を生かした産業振興などによる歳入増加の取組、職員の適正な定員管理や事務事業の精査など、行財政改革による経費の削減を図る。2点目に、住民サービス・利便性の維持向上として、本庁・総合支所間の連携・連絡調整の強化、公民館の機能充実による利便性の向上、まちづくり市民会議や市政懇談会などの開催による市民との協働による地域課題の解決への取組を推進する。3点目に、市全体でのバランスの取れた発展として、合併特例債などを有効活用した投資、総合6次産業都市の推進など、地域の特性・バランスに配慮した事業を展開する。これらの取組を進めることにより、課題の解消に努めたいと考えている。

問2　**合併後10年が経過する中、合併前の2市2町で取り組まれたさまざまな行政情報の記録について、時期を失することなく整理することが必要であると思うが、将来的な行政史の発刊について、どのように考えているのか。**

答　市町誌は、合併前の2市2町でそれぞれ編纂しているが、行政史は旧西条市でのみ「市政40年、50年、60年のあゆみ」として刊行していた。

行政史の編纂については、合併時に調整ができないまま今日に至っているため、今後、行政情報の整理の方法、記録の媒体なども含めて検討したいと考えている。

新政クラブ　一般質問

後世へ語り継ぐ先人・偉人の顕彰を！

問　**市民が、自身の郷土にゆかりのあるかたの功績をたたえ、後世に語り継ぐことは、郷土を誇りに思い、いっそう愛着を持つためにも重要である。**

十河信二像（鉄道歴史パーク in SAIJO 建立）

手本とし、目指す目標として先人・偉人の足跡が身近なところにあることはかけがえのない財産であり、功績を将来につなげ発展させるための取組を行うことが、地域の子どもたちにとっても必要ではないかと考える。このため、語り継がれるべき功績のある先人・偉人について、どの程度把握され、今後どのように顕彰を行っていくのか。

答　本市にゆかりのある先人・偉人については、愛媛県史、西条人物列伝、各地域の市町誌などに基づき、約80名の情報を収集し、現在、その掘り起こしを行っている。

これまで新幹線の生みの親である十河信二氏や小松藩儒官で教育者でもある近藤篤山先生、彫刻家の伊藤五百亀氏、近鉄中興の祖と言われる実業家の佐伯　勇氏の顕彰事業を行ってきたが、これらのほかにも台湾電力の父と呼ばれる松木幹一郎氏に関する市民講座も開催している。また、平成27年9月19日には明治末のシルクロード探検家の日野強氏に関する講演会の開催を予定している。

更に、現在、小学校においては、文部科学省の指導要領に基づき、3、4年生が社会科副読本を用いて禎瑞新田を開いた竹内立左衛門氏、公害問題解決に尽力した一色耕平氏など、地域の先人の業績を通して社会貢献の意味、努力することの大切さなどを学んでいる。

今後、顕彰活動を展開していくに当たり、知名度の有無や存命のかたの扱いなど、一定の基準を設けることは難しいが、それぞれの分野、社会貢献度、各方面に与えた影響などを判断する必要があり、顕彰事業を実施する場合には顕彰の時期もたいへん重要であると考えている。

今後も、文献調査や公民館などを通じた地元への聞き取りを行い、更なる情報収集に努めていきたい。

郷土が生んだ偉人を顕彰し、時代背景やその功績、人となりを語り継ぐことが、将来にわたる私たちの責務であり、郷土をより深く理解し、誇りを持つといった意味でも大きな意義があると考えている。